

Mayumi Tanaka

原点
回帰
be myself

声優

田中真弓 さん



“弱さ”が教えてくれた
“強さ”をさらけ出す強さ

「助けて」と言ってもいい



「裏返し」の態度をとる少女時代 おままごとではいつも父親役

小学校時代の私は、本当は目立ちたがり屋なのに、それを素直に表に出せない「裏返し」の態度をとってしまう子どもでした。みんなの輪に入りたいのに、わざと遠くから様子を見ているようなところがあって。その反動なのでしょうね、年に1度の学芸会と国語の授業で音読する時は本当の自分を大公開! 要するに、学芸会でのセリフや、国語の教科書のカギ括弧を読む時にありったけの感情を込めるわけです。あまりにもやりすぎるので、クラス中が

笑いに包まれることがよくありました。

物心がついた時には「将来は女優になる」と思っていて、そう思っていれば、いずれテレビドラマや映画に出られるものだと思っていたんです。演じることの原点は、もしかすると幼稚園のころの「おままごと」にあるのかもしれない。4、5人の女の子が集まると誰もが「お母さん」をやりたいがります。「ご飯ですよ」とか「早く食べなさい」って言いたいわけです。でもお母さん役は1人なので、お母さん役になれなかった子たちは、妥協し合いながら、お姉さんや赤ちゃんをやることになります。そんな時、私は、いつもお父さん役を買って出ていました。低

い声で「おい、今帰ったぞ」なんて言って、みんなに喜ばれて、それがうれしくて(笑)。のちに声優として男の子の役ばかりをいただくようになるのですが、それも運命だなど、今になって思います。

成績にムラのある私を信じ 背中を押してくれた恩師

小中高を通じて特に印象に残っている先生は、中学3年時の担任、遠藤先生です。私は成績にとってもムラがあり、志望校を受験するにはリスクが高い状況でした。普通なら「志望校のランクを下げなさい」と言われ

るところなのですが、三者面談で、遠藤先生は母に「真弓くんは、うまくいけば受かる可能性があります」と言ってくれました。

先生が私の「良い時の爆発力」に賭けて、受験を後押ししてくれたおかげで、本命の都立高校に合格できました。あの時、私を型

にはめることなく、私の可能性を信じて背中を押してくれた

遠藤先生には今も心から感謝しています。

中学校で始めた演劇は、高校、短大でも続けていて、成人するころには「文学座」「劇団俳優座」といった有名どころの養成所に入りたくて、片っ端から入所試験を受けると全滅。そんな時、ある飲み屋さんに「歌手募集」の貼り紙がしてあり、歌うことも好きだった私は「歌わせてください」とお願いして、そこで歌うようになったんです。その店の常連さんにテアトル・エコー[※]の音響さんがいらして、そのご縁でテアトル・エコーの養成所に入ることができました。そして養成所1年目で『激走!ルーベンカイザー』というアニメのヒロイン役をもらい、それが私の声優デビューとなったわけです。

※テアトル・エコーは1956年に発足した日本の老舗劇団で、特に「喜劇」と「吹き替え・声優」の分野で日本のエンタメ界に大きく貢献している。

2025年10月、舞台「古来稀でも今希なり」で主役を演じ、観客の笑いと涙を誘った田中真弓さん(前列右から3人目)

「声だけ」求められることへの葛藤 役の「声」を想像する楽しさ

声優のお仕事で苦労するのは、役を「演じる」けれども、必要とされるのは「声だけ」というところ。例えば『ONE PIECE』のルフィがセリフを言う時、私は、自分が船の甲板に立ち、目の前には大海原が広がっていて、海風が頬を撫で、大きな空にはカモメが飛んでいてという景色を想像し、ルフィになりきるわけです。でも、収録では声だけが持って行かれる。これにジレンマを感じることは多々ありますね。一方で、声優をしていて楽しいと思うのは、本来は声を持たない生き物やモノを演じるとき。例えば「水とお茶では声が違うだろうな」「どんな声で、どんな話し方をするのかな」なんて想像して声に出して試してみることが楽しくて仕方ありません。

舞台俳優ではなく、声優としての道が開けてしまったのですが、「声優・田中真弓」であることを、とても幸せに思っています。一方で「舞台俳優・田中真弓」も継続中。私は、客席から役者の汗まで見えてしまう小劇場が大好き。でも目標は大きな劇場で公演することなんです。だって、大きな劇場を経験した上で「やっぱり私は小劇場が好き」って言うほうがカッコいいもの(笑)。

困ったら素直に「助けて」と言う それがチームや組織を強くする

私は自分で劇団を主宰しているのですが、最初は「座長としてしっかりしなきゃ」と1人ですべてを背負い込んでいました。でも、船長のルフィは「おれは剣術を使えねえんだコノヤロー!! 航海術も持ってねえし!!」と言い、「おれは助けてもらわねえと生きていけねえ自信がある!!」と仲間を頼ります。完全無欠のリーダーよりも、自身の弱さをさらけ出し、助けを求めるリーダーのほうが、周りが「みんなで支えよう!」と結束し、良いチームになるのだと、ルフィが私に教えてくれました。



学校の先生もクラスを取りまとめる「長」という意味で、共通する部分があるように思います。先生が生徒を頼ることがあっても、あるいはほかの先生たちに「助けて」と言うことがあってもいいじゃないですか。「先生らしさ」よりも、「その人らしさ」が滲み出ている先生のほうが、意外と子どもたちの目には魅力的に映るものです。辛い時は無理をせず、自分に嘘をつかないで。まずは先生ご自身が、心身ともに健やかでいてくださることを心から願っています。

田中真弓さんから読者の皆さんへ
ボイスメッセージが聞けます!!

応援Voice for you



わたしの 本棚



“本棚を見れば、
その人が見えてくる”

田中 真弓さんが自分の本棚から
ピックアップした3冊とは?

01



血と芸 ~非世襲・女方役者の覚悟~

著:河合 雪之丞 かざひの文庫

歌舞伎界出身で「劇団新派」で活躍する河合雪之丞さんの半生記。大ヒット映画『国宝』と同様、血筋が重視される世界で、女方役者として実力で道を切り拓いていく姿に心を打たれました。「女らしさは作るものではなく、滲み出るもの」という言葉に、役者として大いに共感。舞台で共演させていただいたご縁で手に取った1冊です。

02



モノログ集 穴

著:渋谷 悠 論創社

脚本家の渋谷悠さんによる、39編の短い「一人芝居(モノログ)」を収録したユニークな本です。短いセリフの中にドラマが詰まっているので、役者の演技練習や声優のボイスサンプルの原稿としても最適な1冊。演劇ファンでなくても、読み物としても楽しめるはず。先生方が生徒さんに読ませてみて面白い反応があるかもしれません。

03



ごんぎつね

作:新美 南吉 絵:黒井 健 偕成社

子狐ごんが、いたずらをした罪滅ぼしに、兵十に栗や松茸を届けるものの、兵十はそうとは知らず、ごんを撃ってしまいます。倒れたごんの傍にある栗を見て、兵十はすべてを悟り「ごん、お前だったのか」と言うのです。「自分の存在」に気づいてもらえるだけで、救われることがある。ごんのささやかな喜びと切ない最期に、胸が熱くなります。

Profile

たなか・まゆみ 1955年、東京都生まれ。1978年に声優デビュー。『ONE PIECE』のモンキー・D・ルフィ役、『ドラゴンボール』シリーズのクリリン役、『天空の城ラピュタ』のバズー役、『忍たま乱太郎』のきり丸役など、数多くの国民的アニメで主要キャラクターを演じる。一方で、舞台俳優としても精力的に活動し、自身でも劇団「おっ、べれった」を主宰。2024年にはNHK連続テレビ小説『虎に翼』に出演するなど話題に。70歳を迎えてなお声優としても舞台俳優としても表現することへの情熱は尽きない。特技はけん玉。

田中 真弓さんのMust BUY Present

かがやきさんの東京で1番!クイズ(P36) 正解者の中から、けん玉が得意な田中真弓さんオススメの山形工房 競技用けん玉「大空」(日本けん玉協会認定)をプレゼント! たくさんのご応募、お待ちしております!

